Let's know Hiroshima Castle.

しろうや！広島城

No.77

近代の広島城－知られざる爆発物の話

広島城は明治４年（1871）の廃藩置県以降、陸軍の管理下に入りました。最初は鎮西鎮台第１分営、続いて広島鎮台、第５師団が駐屯し、旧城内には隷下の部隊の兵営・武器庫・弾薬庫などが全域に建ち並びました。そのため、当然敷地内では爆発物を取り扱うことになります。今回は、少々物騒ですが、陸軍用地になった広島城内における爆発物のエピソードをお送りします。

１．明治初頭に起こった爆発事故と、そこから垣間見える人生

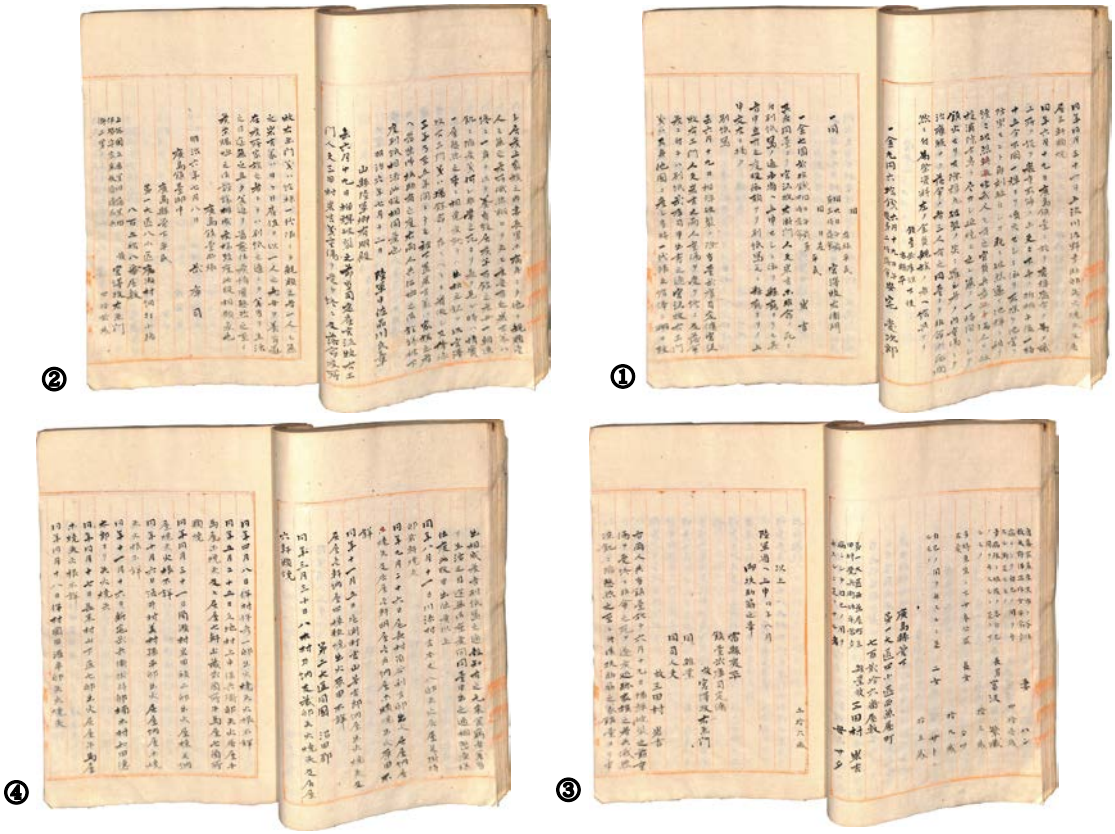

図１　『明治十年九月進達　第一則之内稿本　時變　廣島縣』より、明治６年６月に広島城内でおきた爆発事故に関する記録　　広島市江波山気象館蔵

平成 27 年（2015）に、広島地方気象台に保管されていた古い資料が、広島市に寄贈されました。そのうちの一つ、「時変」と題された冊子には、明治初期に広島で起こった災害が記してあります。その多くは地震、水害、火事、伝染病の記録ですが、そのなかで注目したのは、明治６年（1873）６月 19 日に広島城内で起きた、廃弾の爆発事故のことです。この日の昼過ぎ、陸軍の広島鎮台の職工所で、廃弾丸を処理していたところ暴発し、作業者３名が亡くなっています。その事件の顛末について記されている三つの資料を見ていきましょう。

資料１（図１－①②）は、同年７月 12 日付けの、広島鎮台の司令長官・品川氏章から陸軍卿の山

県有朋への上申書です。6月19日午後1時15分、広島鎮台で廃弾の処理中に暴発し、他の廃弾にも及んで3名の死者が出たこと、亡くなった広島鎮台武庫課の卒族・安宅愛次郎と有禄平民・宮沢牧右衛門の遺族に9円60銭、日雇の岩吉の遺族には7円20銭の祭祀料が与えられたことが、記されています。

さらに別紙では、宮沢牧右衛門の遺族には頼るべき親戚はなく、家族も妻と長男が病気がちであり、生活に困窮するので、3年から5年分の禄（給与）を与えて欲しい旨、また岩吉の病気がちの老母にも、養育費の付与を求めています。

資料2（図1－②③）は、資料1に先立つ7月8日付けの、武庫司から鎮台への申出書であり、その別紙には宮沢と妻、長男、長女、次女の家族構成について、岩吉とその母親についての詳細が記載されています。

資料3（図1－③④）は、同年8月に広島県から陸軍省宛てに、宮沢牧右衛門と岩吉の遺族への、援助を求めた上申文です。

これらの資料から、亡くなった3人の生き様を、知ることができます。

安宅愛次郎は卒族とされています。卒族は明治3年（1870）に下級士族として作られた身分ですが、全国的には明治5年（1872）5月に、士族と平民に分けられて消滅しています。広島県では対応が遅れており、明治6年の6月でも卒族とされていたようです。したがって、安宅が受けていた禄は、後継者（おそらくは息子）に引き継がれたものでしょう。そのためでしょうか、資料2・3の上申書には、安宅愛次郎についての記載はありません。

宮沢牧右衛門（享年42歳）は上総国久留里藩（現在の千葉県君津市久留里）黒田伊勢守の家臣・斎藤泰兵衛の二男として生まれ、おそらくは下級武士の宮沢家に養子に入ったものでしょう。さらに旧幕臣であった矢野沢正作の娘・ハン（41歳）を妻にしています。二人の間には長男・繁蔵（13歳）、長女・タツ（19歳）、次女・サト（15歳）があるものの、妻のハンは病気、長男・繁蔵は眼の疾患により、自分の身の回りの世話も十分にできない状態だったようです。ただ長女・タツは、広島ではなく東京で下女奉公に就いており、家計を助けていたと思われます。家族が住んでいた場所は、広瀬村網打小路（現在の中区小網町）とあり、広島城下町の片すみで、ささやかに暮らしていたようです。この宮沢の家族が、いつ頃？どんな理由で？関東を離れ、広島に移り住んだのかは不明です。もし早い時期に広島に来ていたら、平民としてではなく、安宅愛次郎と同様に、卒族として禄を受けていたかもしれません。

岩吉については、父親のことが書かれていません。病気を患った母親・サタ（56歳）と、サタの兄・三田村覚兵衛の西魚屋町（現在の中区袋町）の家に同居していたようです。事故死したときには、名字も無かったようですが、急遽、伯父の名字の三田村を名乗っています。

これらの3つの資料から、明治維新後の人たちの生き方の一部を、垣間見ることができました。最後に、陳情は成功したのでしょうか？。その結果については書かれていません。あくまでも自分の考えですが、この事件は新しい世の中が始まった明治初期のことです。長州閥の親分格であった山県有朋に、その盟友の品川弥二郎の息子・品川氏章が要望した一件です。山県にとって無視することは、できなかったはずです。要望は叶えられて、「二人の遺族には、誠意ある支援が行われた」と自分は信じています。　（「ひろしま歴史探検隊」ボランティア　尾川健）

2．爆発事故から周辺を守る土塁

1のエピソードでもお分かりのとおり、弾薬が爆発すると大変なことになります。ましてや、火薬や弾薬を保管している倉庫で事故が起これば被害は甚大です。大正10年（1921）8月8日、広島陸軍兵器支廠火薬庫区（現在の南区霞一丁目・中国四国管区警察学校）にあった填薬弾丸の倉庫で爆発が起こりました。填薬弾丸とは火薬を填実し信管を取り付けた弾丸のことです。この事故で火薬庫区内の倉庫や工場が大破・倒壊し、一説では9名が死亡、多数の負傷者を出しました。約1.3キロ離れた広島陸軍被服支廠でも塀に亀裂

が入るなどの被害が出ています。また、翌日には火薬庫区の西隣にあった兵器庫区（現在の南区霞一丁目・広島大学霞キャンパス）でも爆発が発生し、さらに被害を出しています。

こうした爆発の被害を軽減するために、建物自体を強固にするのはもろん、その周辺には土塁が設けられていました。陸軍兵器支廠の火薬庫区にも設けられており、その一部が今も残されています（図 2）。

図2　残された広島陸軍兵器支廠火薬庫区の土塁

さて、昭和 14 年（1939）および 20 年（1945）に撮影された航空写真を見ると、広島城内にも土塁を伴った倉庫がいくつか確認できます。一つは現在の中区西白島町 21 ～ 24 番ブロックにあった第 5 師団兵器部弾薬庫です。図 3 は被爆後の弾薬庫を撮影したもので、土塁がかなり強固に造られている様子がうかがえます。この土塁は昭和 37 年（1962）までは一部を除いて存在が確認でき、昭和 41 年（1966）には姿を消しています。実に終戦から 20 年ほどもそのままになっていたわけですが、崩すのも容易ではなかったのかもしれません。

図3　被爆後の第5師団兵器部弾薬庫の土塁
昭和20年秋撮影
所蔵：米国国立公文書館 提供：広島平和記念資料館

あとは旧城内に駐屯していた各部隊の火薬庫・弾薬庫です。図 4 は輜重兵第 5 連隊の弾薬庫で、場所は現在中区基町に建設中のサッカースタジアムの西側、本川沿いに設けられていました。この土塁も周辺の開発が進む昭和 50 年代ごろまで一部残されていたようです。

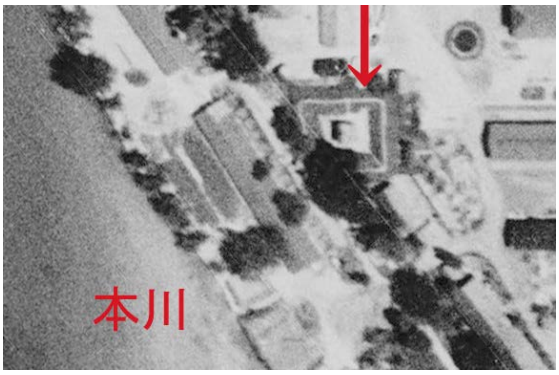

図4　輜重兵第5連隊弾薬庫　昭和20年7月25日撮影

図 5 は被爆後の野砲兵第 5 連隊火薬庫の様子です。西側内堀の際に設けられおり、内堀を挟んですぐ東側には天守がありました。ここの土塁は昭和 22 年（1947）の航空写真で、すでに判然としなくなっています。周辺では被爆後の住宅難を解消するための市営住宅の建設が進んでおり、早々に撤去されたのかもしれません。

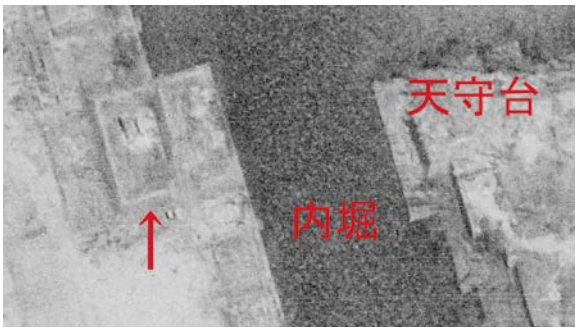

図5　野砲兵第5連隊火薬庫　昭和20年8月8日撮影

図 6 は現在の広島高等裁判所内にあった歩兵第 11 連隊の火薬庫です。こちらの土塁は今も北側と東側が L 字型に残されており、旧城内にあった土塁としては唯一その姿を今に留めています。

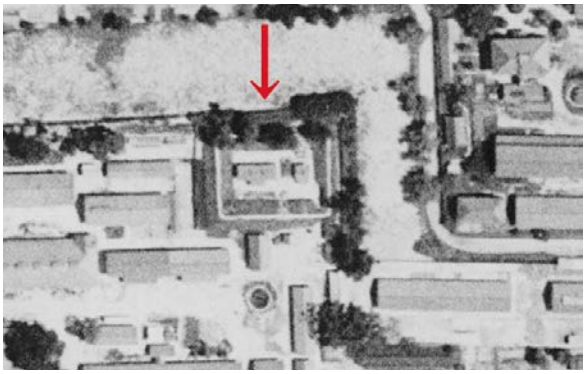

図6　歩兵第 11 連隊火薬庫　昭和20年7月25日撮影
図4～5はいずれも米軍撮影　国土地理院蔵

（広島城学芸員　本田美和子）

コラム　－これからの広島城－　天守の木造復元の事例

広島市では、天守の木造復元に向けた調査・検討を行っています。今回は、天守等の木造復元を実現した他の城郭の事例を紹介します。

戦後、木造で復元された天守または天守相当の櫓は、白河小峰城（福島県白河市）、掛川城（静岡県掛川市）、白石城（宮城県白石市）、新発田城（新潟県新発田市）、大洲城（愛媛県大洲市）の５例です。

史料に基づいて復元された初の事例は白河小峰城三重櫓です。三重櫓は寛永９年（1632）に建てられた白河小峰城の象徴となる櫓で、実質的な天守でしたが、慶応４年（1868）の戊辰戦争により焼失しました。復元に際しては、文化５年（1808）に作成された図面である『白河城御櫓絵図』が基礎史料とされ、発掘調査で検出された完全な状態の礎石と合わせて平成３年（1991）に忠実に復元されました。

平成６年（1994）に初の木造復元天守として、掛川城天守が復元されました。創建された当初の天守は慶長９年（1604）に地震で倒壊し、江戸時代に一度再建されています（その後、地震により再び倒壊）。復元にあたり参考とされた絵図は江戸時代後期のものでしたが、高知城天守などを参考に、築城当初の姿を想定して復元されたため、厳密には史料を根拠とした忠実な復元ではありません。

翌平成７年（1995）に復元された白石城大櫓は、発掘調査と江戸時代の絵図をもとに、伝統的な工法で史料に忠実に復元されました。天守に相当する三重三階の大櫓は、いくつかの現存天守をしのぐ大きさのものです。

平成 16 年（2004）に 復元された新発田城三階櫓は、丁字形の屋根に三つの鯱瓦がのる国内唯一の三階櫓です。創建当初の三階櫓は火災により寛文８年（1668）に焼失、延宝７年（1679）に再建されましたが、明治初期に破却されています。復元は、絵図や寸法が記された文献史料、発掘調査や古写真をもとに、江戸時代に再建された後の姿で復元されました。

同じく平成 16 年（2004）に復元された大洲城天守は、史料に基づき復元された初の天守です。江戸時代に創建された天守は、老朽化等により、明治 21 年（1888）に解体されましたが、様々な角度から撮影された写真や、絵図史料、立体の天守ひな形があるなど復元のための史料が豊富に残されていました。これら豊富な史料をもとに、四重四階の戦後最大となる木造天守が復元されました。木材はできる限り地元産のものが調達され、柱材の９割を占めています。地元にない大きな木材は木曾地方の天然ヒノキ等が使用されました。

これら５例の建物は、広島城天守よりも小規模で、いずれも復元当時は国が指定する史跡ではありませんでした。　（広島市市民局文化スポーツ部文化振興課広島城活性化担当）

木造復元された大洲城天守
大洲市観光まちづくり課提供、大洲城天守閣復元事業報告書より

しろうや！広島城

編集・発行
公益財団法人広島市文化財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町 21-1
電　話：082-221-7512
ＦＡＸ：082-221-7519

令和５年 11 月 22 日発行

広島城利用案内
開館時間：９：00 ～ 18：00
（12 月～２月は９：00 ～ 17：00）
入館の受付は閉館の３０分前まで
入館料：大人３７０円（２８０円）　中学生以下無料
高校生相当･シニア（65 歳以上）１８０円（１００円）
（　）内は３０名以上の団体料金
休館日：12 月 29 日～１２月３１日（臨時休館あり）
ホームページ　http://www.rijo-castle.jp

「しろうや！広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます